

猫 蓑 通 信

第 96号
平成 26年
(2014年)
7月15日発行
(年4回発行)



二村文人さんを悼む

青木秀樹

平成二十六年六月十一日、二村文人^{ふたむらふみん}さんが急逝された。一報を受けた時、何かの間違い、聞き違いかと思ったくらい信じられないことだった。それというのも、六月一日の猫蓑会主催「深川連句会」の二次会に学会を終えた文人さんがお見えになり、初対面のメンバーを含めて懇談されたばかりだったからである。

文人さんは信州大学で東明雅先生の教えを受け、その後、都立大学大学院在学中は関口芭蕉庵での「連句教室」で連句実作に励んでいた。明雅先生の最も古い弟子の一人だった。関口芭蕉庵での今宮水壺さん棚の席でのエピソード、男の名呼びましがへる闇の中 千恵子 俺のことかと首を出す犬 明雅

ここまでは、東明雅先生追悼集『安曇野は昏れて紫』で鈴木千恵子さんが紹介しているが、一座していた文人さんは自作「脂身ばかり安いトンカツ」の方が匂付でよかったのに、と後々まで嘆いていたという若い頃の横顔がある。思うに、猫蓑会会員の大部分が信州大学退官

後の明雅先生しか知らず、「めいが先生」と呼んでいるのに対して、文人さんが「あきまさ先生」と呼ぶのは、学生時代に抱いた明雅先生への敬意の現れだと思う。

文人さんは富山大学に赴任するに際して、明雅先生から北陸三県での連句普及を託され、その付託に応えるべく努力を続けられた。先ず富山県での地盤作りを行い、多くのレベルの高い連句人を育てた。富山県での国民文化祭の募吟形式を国民文化祭として初めて歌仙として成功を取めた実績がある。その後、福井県での国民文化祭開催に際しては福井県での連句普及に尽力し、三年間毎月武生市で開催される月例会に欠かさず出席、いつも笑顔で指導された実績もある。文人さんに連句普及、人材育成の成果を褒めると「明雅先生の真似をしているだけです」と奥ゆかしい答えが返ってきた。

文人さんは富山大学人文学部教授として江戸時代の文芸、芸能を中心に講義をされていた。人形浄瑠璃、歌舞伎、落語など幅広い教養人である。亡くなった中川哲さんの小芝居の話に熱心に耳を傾けていた文人さんの姿も懐かしい。学問も連句も「好きなことをしているだけです」

●目次

第二十四回猫蓑同人会興行作品

歌仙全八巻のうち四巻

五十年後のまさか【執筆を終えて】 武井雅子

第二十八回亀戸天神社藤祭正式俳諧二十韻

藤祭正式俳諧配役

第二百二十九回例会藤祭興行作品 二十韻九巻

亀戸天神社奉納直会興行作品 二十韻二巻

正式俳諧三題 根津芦丈・東明雅・式田和子

温故知新13・実ありて哀しびを添ふる

第十八回えひめ俳句連句全国大会受賞作品

歌仙「美祿」 鈴木千恵子

歌仙「甚平の藍」 佐々木有子

事務局たより

という彼の声が聞こえてくるように思う。

実は私は文人さんと一座したことは一度しかない。平成十二年の「芦丈翁三十三回忌」の文人揃で、連衆は式田和子、松本碧、それに私。自由自在な捌きに感心した覚えがある。

文人さんは日本の連句界にとつて極めて重要な人物だと私は思っていた。法人化された日本連句協会の会報第一号(通巻一九七号)の巻頭を文人さんに依頼したのは、将来を期待してのことであり、「いつ東京に帰ってくるの」と会うたびに彼に問うたのも、将来の日本の連句界を背負って立つ人材だと思っていたからである。還暦を過ぎたばかりの文人さんの、若すぎご逝去は惜しんでも惜しみきれない。慎んでご冥福をお祈りいたします。

あらたうとの座

歌仙「声懐かしき」

式田恭子 捌

二村文人を偲んで

大向う声懐かしき夏歌舞伎

きりりと締める梅雨晴の帯

補助輪の取れぬ弟しんがりに

公園までのなだらかな坂

持ち寄りの銘酒自慢に月昇る

忘れ扇をさがす縁側

鶴頸に蔓竜胆を挿し入れて

口笛無視し女子は速足

通せん坊あなたあたしの何なのさ

消したいタトウ深きくれなゐ

冴ゆる月もの悲しくも城塞に

森の奥処おくかに眠る寒猿

信玄の塩の道など案内して

記録必ずブルーレイにし

コピーして己のフィギュア作る人

風呂敷でぬぐひ日本みやげに

山手線花満開の駅で待つ

ビルの間にほのと初虹

ナオ 長閑なり柵に昭和の薬壇

滑川なめりがはにはまだ見ない橋

魚料理旬の蘆薈あぶら尽きぬ父

所作のひとつで素性知られる

比咩ひめ神は願ひのままに化身して

恭子

冬乃

啓子

文字

乃

恭

文

啓

恭

乃

啓

文

乃

恭

文

啓

恭

乃

啓

文

乃

恭

文

逢引の場に蛇の抜け殻

港には行かせたくないプチホテル

裏街詩人旅のまにまに

鷹匠の合図に鷹の飛び立ちぬ

ざざ虫を食む老いの健康

有明に俯いつも偲はれて

紅葉の色はずつと変はらず

ナウ 名産は煮豆煎餅栗羊羹

私服の僧がちよつと一服

本当は入つてみたい草野球

バンド練習持ち曲が増え

師を囲む玉楼の座に花の雨

遠くの山も里もかすめる

連衆 百武冬乃 小池啓子 橘 文字

夏草やの座

歌仙「柿の臺」

新宿にも仕舞家のあり柿の臺

夏燕飛ぶ電柱の先

バイオリン演奏中に弦切れて

ちよつぴりつらいふかふかの椅子

雲の間見え隠れする望の月

サッカー選手のかかし評判

秋深し古竈の火絶やすまじ

ためらひ捨てて好きと言ひたい

段階がありさうでない恋の技

啓

恭

乃

啓

文

乃

恭

文

啓

恭

乃

文

啓

サーカス団の象の曲芸

町外れはがれかかつたピラヒひとつ

非番の刑事またもくつさめ

月冴える本屋大賞ありがたし

眼鏡の鎖きらり金色

ペルシャ猫ソファアの上で丸くなり

サプリメントとコーヒーの日々

朝市の野菜が土産花の旅

軽くあたたか気に入りの靴

ナオ 春の夢兒らを未来へいざなふか

船長さんは若田光一

ぐるりと廻つてみせるウルトラC

柱時計のねちをきつかり

この先も増税ばかり自民党

阿呆陀羅経の聞こえる国

深く抜く緞の衿ちらとキスマーク

南京虫も出つ尻に惚れ

切なきは中島みゆきのわかれ歌

ハスキーなのは母譲りらし

月の舟いつのまにやら傾きて

釣糸垂らす旬の鮒

ナウ おすそわけどうぞどうぞと今年酒

知らぬ人住む遠い故郷

クレパスの描く山嶺鈍角に

窓を開けてもビルの壁だけ

花吹雪禰宜と神父は同級生

集合写真写すうららか

連衆 島村暁巳 佐々木有子 松本碧

間瀬美美

巳

全

や

碧

有

巳

芙

有

全

碧

巳

芙

巳

芙

碧

有

や

有

巳

全

芙

有

碧

巳

有

や

碧

雲の峰の座
歌仙「角筈に」
高塚 霞 捌

角筈に白き陽さしやついり晴 霞
 藍まだ浅きあぢさゐの色 了齋
 プラモデル丹念にバリ削るらん 淳子
 頃合もよく薄茶一服 和代
 夕星を従へ沈む三日の月 昭
 冷えて駱駝に寄る旅の人 齋
 濁り酒寂しく酌めば山の風 淳
 あつと言ふ間に噂拡まる 代
 湯上りのせいじやないわと頬を染め 齋
 キラキラネーム誰も読めない 淳
 こすつても消せぬタトゥーをなんとせう 齋
 ひたすら暗記般若心経 淳
 寒月下単線電車横揺れに 代
 丸いポストが凧の中 昭
 失せ物がふつと見つかる小抽斗 代
 座右の銘が思ひ出せない 齋
 枝かつぐ花盗人は罪ならず 淳
 子への土産はきしやごおはじき 全
 ナオ学校の巣箱の口は南向き 昭
 出入りせはしき評判の店 齋
 落語聞き笑つて帰りそのまんま 淳
 芭蕉足跡残る北陸 齋
 解纜の汽笛は長く尾を引きて 代

平成二十六年六月十五日
新宿ワシントンホテル 新館

灯も涼しけれ踊る甲板 淳
 汗も血も恋すればみな美しき 齋
 汝が心臓を射抜く弾丸 全
 うづくまる牢屋の隅の薄布団 淳
 とめどもなしに想ふ故郷 代
 あの月のあたりに父も母もゐる 齋
 息荒くして初獵の犬 淳
 ナウホイル焼きマツシユルムにチース載せ 全
 選びて買ひぬ有機栽培 代
 凸凹もくねくねもよし世の中は 齋
 土鳩はなつき雀なつかぬ 淳
 花浴びて嬰のまどろむ宮参り 霞
 沖の海市を夢かとぞ見る 昭

連衆 鈴木了齋 上月淳子 長崎和代
 松原 昭

田一枚の座
歌仙「父の日や」
石川 葵 捌

父の日やおが「は」となりし感謝状 葵
 喉を潤す麦酒本物 ひろみ
 遊覧船デッキに足を投げ出して 美恵
 北北東に面舵を切り 佳之子
 連山をあまねくみせる十七夜 秀樹
 オリブの実のひそと色づく 恵
 爽涼に大工仕事はとんとんと み
 金も力も妻が持つてる 之
 闇ごとで盗む指紋とパスワード 全

ピルケースには青き眠剤 葵
 村外れ藪のほとりのお医者さま 恵
 尺のつららを照らす月光 之
 国宝の小さき仏の寒さうに 樹
 ゆで卵売る婆の副業 全
 三陸の鉄道開通初乗りす 全
 岩波文庫膝に閉ぢ置き 恵
 チェシヤ猫の笑ひの残る花の空 全
 放物線を描く連風 樹
 ナオ雛飾る調度は碁盤貝の桶 之
 四寸柱黒光りさせ 樹
 修道院十字切る人ひざまづき 恵
 このごろ音のずれるオルガン 樹
 忍び逢ふ秘湯源泉かけ流し 樹
 脱いだ水着はひと握りほど 恵
 銭取つて河童の木乃伊見せる小屋 之
 メビウスの輪は裏か表か 葵
 鵬外の墓は名のみ林太郎 恵
 はかなきものは少年の夢 全
 月影を頼り沼地を行軍す 全
 へつびり虫を見れば逃げ出し 恵
 ナウ悪僧は教頭先生村芝居 之
 死神君の役は抽選 恵
 切れさうな蛍光灯のちかちかと 葵
 客の呼べない春スキー場 恵
 花吹雪きのふけふあす生きてをり 葵
 香り樂しみ一番茶呑む 執筆

連衆 江津ひろみ 山口美恵 染谷佳之子
 青木秀樹

正式俳諧 猫蓑会



巻き終えた一巻の懐紙を手に執筆（中央）の吟声が神楽殿に響く。向かって左が宗匠、右が老長

五十年後のまさか

執筆を終えて

武井雅子

その昔、松本元町の家に何度か芦丈翁がお見えになりました。時々「ガオーツ」と大きな咳払いをなさる方で二階にもその咳払いがよく聞えました。文字通り私も芦丈先生の訾咳に接し

ていたわけですが、あれから五十年、まさか私が正式俳諧の執筆役をすることになるとは思いもよらぬことでした。はじめは私ごとときがとんでもないと思いましたが、一大決心をしてお受けすることにしました。正式俳諧興行は芦丈翁のお教えを受け継いできた猫蓑会にとって大切な行事だからです。改めて今まで三十二回も芭蕉忌の正式俳諧興行が行われてきた歴史の重みも感じました。心を引き締め、お受けした以

第二十八回
亀戸天神社藤祭正式俳諧

俳諧之連歌 二十韻

朱の橋を渡れば藤の香りけり

栗の音連ふ快き東風

春暖炉兄と一緒に囲みぬて

ネットゲームの順番を決め

ウ 砂走る裸足の記憶昼の月

忘れはしないあのときの薔薇

銀幕のヒロインいつも言ひ寄られ

地中海には小さき王国

城壁のあちらこちらに眠る猫

宅配ピザのバイト見習ひ

ナオ 日記書く瓶のインクが凍りをり

静寂を破り火事の鐘鳴る

びしと濡れのままのあなたを抱きしめて

永遠の愛願ふ一瞬

満月に欠くる兆しか翳りあり

しびれを切らず南瓜ころりと

ナウ 秋場所の夢の優勝分つ美酒

仏足石のやうな扁平

書き散らす文字みな花を歓べり

巢立ちの鳥の鳴き交す庭

秀樹

文子

良子

郁子

淳子

恭子

曉巳

忠史

碧

讓介

文人

千恵子

佳之子

有子

了斎

鐵男

アンズ

明子

孝子

執筆

平成二十六年四月二十三日 首尾

亀戸天神社神楽殿に於いて興行

上はしっかり全うしなければの一心で、それまで漠然と見ていただけだった執筆の所作ひとつひとつを練習することになりました。

手許にある細かな手書きの手引き、「猫蓑派正式俳諧次第」を読み込み、身体できつちり覚えることに。見ているのと実際にやるのは大違いで、挙措、吟声、歌膝をして懐紙に筆で書くなどはじめてのことばかりです。

手順はイメージを頭に描き、所作は落ち着いてゆっくり。足の運びは「進左退右」、「起右座左」を身体にしみこませることにしました。吟声はただ大声を張り上げるのではなく、はつきりとゆったりと句の意味を伝えることに重点を。ふだん何気なく書いていても吟声すればわかりにくいと思われる言葉が意外にあり、漢語を和語に換えるなどいろいろアドバイスをいただきました。



まず、花司（手前右）が菅公図像に献花するため花を活ける



一般観覧者に向けて解説

このように暑い夏を練習に費やして臨んだ芭蕉忌でしたが、リスクは思いがけないところにあるもので、十月十六日はまさかの台風襲来の荒天。亀戸では風邪をひき本番まで一ヶ月半も治らなかつたまさかの「こえわずらい」にはらはらし悪い夢をみるほど。そしてお稽古の日も雨。しかし、四月二十三日の藤祭りは見事に晴れ上がり、十月の荒天を挽回する好天に恵まれ、幸い吟声も滞ることなく終えることができました。懐紙が風に飛びそうになり宗匠が咄嗟に押さえて下さったハプニングもありながら、硯箱を捧げ持って執筆仮座に戻った時は心底ほっと安堵しました。神楽殿からの揺れる藤浪、人の波は東の間最高の眺めでした。

練習を始めた頃、先輩の方が「周りの方への感謝の気持ち忘れずにいけば大丈夫ですよ」とおっしゃって下さいました。まさにその通りで、芭蕉様、天神様が後ろについて下さり、本当にたくさんの方々のおかげられ、支えられ、お世話になりました。感謝の気持ちでいっぱい

です。
亀戸天神での正式俳諧興行は（次ページへ）

亀戸天神社藤祭り正式俳諧配役

- | | |
|-----|-------|
| 宗匠 | 坂本 孝子 |
| 脇宗匠 | 橘 文子 |
| 執筆 | 武井 雅子 |
| 知司 | 鈴木 了齋 |
| 副知司 | 松島アンズ |
| 座配 | 全 |
| 花司 | 林 転石 |
| 配硯 | 佐々木有子 |
| 同 | 野口 明子 |
| 老長 | 本屋 良子 |
| 解説 | 式田 恭子 |



儀式に加わっていただいた神職を交え、菅公図像を背に記念撮影

ここ三年準立礼に変わり、一昨年は本殿で、昨年からは神楽殿での興行となりました。作法も試行錯誤でしたが、漸くすつきり落ち着いたものになってきました。長年やってきた天神さまの室内での興行がなくなり、歌膝ができない、床

几にかけながらのお辞儀は中途半端に感じるなど、寂しさはありますが、神楽殿では解説つきで一般の方にも見ていただけるメリットが大きく、解説が好評で今年の観衆は二百五十名程とか。関心を寄せて下さる方が多かつたと聞きました。間近で見て下さった方がすぐ猫蓑会に入会されたのも嬉しい驚きでした。

お父さん、吟声は聞えましたか。及第点はもらえますか。

文台は芭蕉忌には五十嵐讓介様製作の「左沢」、亀戸天神では芹丈翁ご染筆の「村尾花」文台を使いました。猫蓑会の正式俳諧の伝統はこれからも皆で守っていきます。



執筆（中央）の文台拭き。

遠震の座

二十韻「撫牛」

吉田醉山 捌

撫牛の背もあたたかや天神社

醉山

笙の音に乗り揺る藤房

有子

春裕知らない駅におり立ちて

碧

磁石の針の向く方へゆき

転石

ウ サイダーを運ぶ歩荷を月照らす

有

ドキリときめく行水の君

山

落ちてゐるこんなに長いつけまつ毛

石

親に似ぬ鼻親に似ぬ唇

碧

大枚をはたいて買ったピカソの絵

山

超豪邸に名士集まる

有

ナオ 寒中にメンコビー玉昭和の子

碧

推理小説咳こらへ書く

石

友人の女房思へば眠られず

有

抱きついていく俺は蟻螂

山

月皓々余白余白に経を読む

碧

盆で棟梁図面描けず

石

ナウ 屋上で仮面ライダー変身し

山

試食品には楊枝紙皿

有

飲めば酒開けば花の玲瓏と

石

絹のスカーフ結ぶ弥生野

碧

連衆 佐々木有子 松本 碧 林 転石

靈天の座

二十韻「吟声清し」

橘文字 捌

藤波や吟声清し神楽殿

文字

袴の裾に触るる軟東風

雅子

子どもらとトランプ遊び長閑にて

郁子

パソコンゲーム操作順調

太郎

ウ 十三夜謙信の名を持てる犬※1

かりん

女嫌ひの役で地芝居

雅

爽やかな彼の面影忘れず

郁

予期せぬことも愛を深める

雅

この頃は駄文の多きニュース記事

ん

百年目なる「読む日々」※2

文

ナオ 久闊を叙して爛酒酌み交し

郁

ふくら雀の並び押し合ふ

雅

湯巡りを笛吹川のあつちこち

ん

恋のナビ欲し助手席の僕

郎

夏霜に濡れ肩抱き路地奥へ

全

蛭有りますの札掛かる店

ん

ナウ オリンピックめざし高らか槌の音

雅

山を仰ぎて父に語りき

ん

大皿に珍味盛り上げ花の宴

郁

嘸の辺り暮れかぬ頃

郎

連衆 武井雅子 東 郁子 功刀太郎

登坂かりん

※1 謙信・松本在住当時の東明雅家の柴犬

※2 心・平成二十六年四月二十日漱石の「朝日新聞再連載開始

陽炎の座

二十韻「巫女の髪」 染合佳之子 捌

藤の香や奉書で包む巫女の髪 佳之子
 ゆらりゆらりと胡蝶舞ふ庭 恭子
 写生する指呼の間の塔のどらかに 節子
 車内放送声の大きく 敦子
 釣堀は静かに月を浮かべたる 恭
 ライトアップに踊る噴水 之
 逢ふたびに抱きしめられて紡ぐ夢 敦
 この子誰の子きつとあなたの 節
 颯爽と弁護士軍団登場す 之
 何の燃え滓ストープの中 恭
 ナオ 枯野原すれ違ふたび挨拶し 節
 賓客迎へ警備強化に 敦
 背広内そのふくらみはピストルか 恭
 企業スバイと知らず惚れ込む 之
 愛妻の料理頬張る望の月 敦
 物の音澄みて水も澄みゆき 節
 ナウ バイエルの出だしつまづくそぞろ寒 之
 葉の時間またも忘れて 恭
 故郷の駅舎を覆ふ花大樹 節
 揃ひの帽子遠足の列 敦

連衆 式田恭子 長坂節子 武井敦子



鯨曇の座

二十韻「藤房の」 西田一枝 捌

藤房のまた伸びにけり亀の池 一枝
 諸人集ふうららけき庭 路子
 種おろし準備万端整へて 了斎
 近づいてくるジョギングの音 泉子
 置き去りの自転車凍つる月の影 則子
 暦買はうか日記買はうか 斎
 人間のクズと呼ばれる女癖 全
 恋と愛とはどこか似てゐる 路
 額づいて祈り捧げる礼拝堂 泉
 修学旅行更衣して 則
 ナオ 水筒に入れた焼酎そつと撫で 斎
 男らしさの匂ふ低音 路
 抱き通す一夜の後に漁へ出る 斎
 下弦の月の沈む山の端 路
 カナカナとどこかへ誘ふやうに鳴く 斎
 瀬祭忌には風呂を沸かさう 泉
 ナウ 銘仙の座布団團に片付けて 枝
 肱を枕にごろり爺様 路
 育雛の箱にかかれる花吹雪 泉
 青き踏みゆく新しき靴 則

連衆 倉本路子 鈴木了斎 青木泉子
伊藤則子

初虹の座

二十韻「そよぐ風」 根津忠史 捌

そよぐ風類に触れなん藤の房 忠史
 太鼓橋とて渡る小雀 美恵
 春の色設へおける弁当に 志世子
 海外ミステリ読み掛けのまま 未悠
 月凍つる高速道路深夜バス 英二
 霜焼の掌を暖めてやる 世
 郵便の配達時間待ち焦がれ 悠
 煙草臭にはちよつと辟易 恵
 星からの謎の電波にコンタクト 世
 将軍様は刈り上げが好き 史
 ナオ 飼主にいよいよ似てきた蝸牛 恵
 菖蒲刀で遊ぶ兄弟 英
 新調の松皮菱の小紋着て 悠
 ベッドの軋む音に肌寒 悠
 シヤガールの月夜に二人空に浮く 悠
 焼きりんごの香路地の奥から 世
 ナウ 急ぎ足鉢僧とぶつかつた 悠
 覚めてくれるなラッキーな夢 世
 乳呑児のアルカイックスマイル花の下 恵
 初虹架かる天領の里 英

連衆 山口美恵 秋山志世子 棚町未悠
高瀬英二

平成二十六年四月二十三日
於 亀戸天神社

蜃楼の座

二十韻「借景に」

高山鄭和

捌

借景にスカイツリーや藤祭 鄭和
 大太鼓打つ風光る中 孝子
 曲げわつぱ紅鱒寿司を盛り込みて 俊子
 ほほ糸みをさめ含む焙じ茶 常義
 高速道寒月を追ひ突つ走り 曜子
 ちよつと危険な先生と弟子 孝
 細胞の突然変異惚れつぽく 全
 商店街に並ぶ妖怪 俊
 ひそと置くカレイドスコープ柵の奥 義
 ショートパンツをはいてカラフル 曜
 ナオ 貝殻を拾ひ恙の夏の果て 孝
 御殿場線の閑疎なる駅 曜
 機関銃セーラー服がぶつ放す 義
 女犯の面をさらすお命講 孝
 月照らす小牡鹿の鳴く黒き森 俊
 ポトル幾つもお倒す長き夜 孝
 ナウ 分別のゴミ出す夫を見送りに 曜
 丘の向うに流れ行く雲 和
 飛花落花海の匂ひのいや増せる 義
 指やはらかにつまむ蝶々 俊

連衆 坂本孝子 三木俊子 生田日常義
 前田曜子

朧夜の座

二十韻「額に触るる」

名古屋富子

捌

藤房や額に触るるほどにまで 富子
 風やはらかに渡る池の面 霞
 ファッション誌春の特集組まれみて あや
 隣の犬のなつく家政婦 秀樹
 暗号文月の露台に向けて投げ アンズ
 ハンモックから抱き合ひて落ち 霞
 新製品いい匂ひする絆創膏 や
 満員電車の中で内職 や
 年寄りの掏摸をやうやく御用にし や
 歌舞伎の世界世代交代 富
 ナオ 家紋つき襟巻をしてキャバクラへ 樹
 炬燵から出る毛脛三本 全
 おだてられうちのみこも鼠獲る 樹
 風の盆には慕ふ佛 霞
 月静か最後の恋と思ひつつ や
 指に数へる秋の七草 ア
 ナウ ワイン添へダイウイカのフルコース や
 ビットコインですます決済 霞
 西行の愛でたる花を見る旅に 樹
 蛇の羽音の誘ふうたたね ア

連衆 高塚霞 中林あや 青木秀樹
 松島アンズ

逃水の座

二十韻「木漏れ日」

佐藤徹心

捌

木漏れ日や裾にこぼれて香る藤 徹心
 お玉杓子のふくらめる池 明子
 パンケーキ返す厨のうららかに 千恵子
 アイロンびたとかけるエプロン 淳子
 隣人と縁台将棋照らす月 昭
 妻は美形で庭は青芝 恵
 古漬も昔の彼もなつかしく 淳
 座禅の席で腹の虫泣き 明
 リンダさんまだ若いわね足あげて 淳
 新幹線の陰で廃線 明
 ナオ 規格外山盛で売る冬林檎 淳
 寒稽古の子気迫漲る 恵
 二回り違う夫婦のペアルック 昭
 葡萄酒醸すやうな愛情 恵
 月明し仙人の棲む山かげに 淳
 罫に帰る椋鳥の声 昭
 ナウ 神官の祝詞難解きりもなく 明
 着飾る母に目を見張る皆 心
 満開の花に誘ふ乾門 明
 塔より望む海のうららか 昭

連衆 上月淳子 鈴木千恵子 野口明子
 松原昭



春陰の座
二十韻「心字池」 江津ひろみ 捌

心字池藤の花房揺れにけり ひろみ
 琴弾鳥に立てる聞き耳 良子
 到来の八朔柑を配るらん 弘子
 焙煎コーヒー白いカップに 要子
 ウ 夏富士の山の端近く出づる月 健
 初浴衣着て少女はにかむ 良
 太鼓打つ彼の上腕二頭筋 弘
 攫はれさうなひと刷毛の風 良
 ハーメルの笛吹き男につらなりて 要
 悪い奴ほどなぜか優しげ み
 ナオ あこがるる湯気ほのぼののねぎま鍋 健
 北の漁場は声も凍てつく 弘
 臆病の酒にまかせて告白す 良
 柔肌抱けばふつと後れ蚊 健
 月光に般若の面笑み湛へ 弘
 京の町屋に草紅葉燃ゆ 要
 ナウ 老耄の筆筒預金も億となり 良
 野良猫をればつい餌をやる 健
 天平の藁を囲む花の雲 良
 耕の人動く遠近 要
 連衆 本屋良子 松原弘子 山本要子
 由井健

平成二十六年四月二十三日
於 亀戸天神社

亀戸天神奉納直会興行より二巻
平成二十六年五月十四日 首尾
於 錦糸町 Kawara

二十韻「藤若葉」 鈴木了斎 捌

直会や清酒に映す藤若葉 佳之子
 薄暑の空の晴れわたりたる 了斎
 交差点せかさながら走りぬて 恭子
 大切さうに提げるゆるキヤラ 転石
 ウ 今もなほ天には玉兔だけが棲む 斎
 電車待つ間に啜る新蕎麦 之
 物の音よ澄め片恋のラグタイム 石
 離れてみたり抱きあつたり 恭
 丹前を肩に引つ掛け去にしひと 之
 雪駄の下に霜柱散り 斎
 ナオ 病院の夜間のドアは右の奥 恭
 アンネ・フランクここに隠れる 石
 消えやすき夢は草蜻蛉のやう 斎
 女性刑事が犯人に惚れ 之
 死なうかと男ささやく寒月下 全
 凍つる庵から数珠切つて出て 恭
 ナウ 風向きをブイの動きが教へをり 石
 小旗のやうに鱗干す竿 斎
 幼子の背中で眠る花疲れ 恭
 八十八夜心地よきころ 石

連衆 染谷佳之子 式田恭子 林 転石

二十韻「連句十巻」 武井雅子 捌

奉納の連句十巻風薫る 雅子
 若葉の杜の濃くも淡くも 秀樹
 パフェサンデーメニュー暫く眺めぬて 文子
 BGMに心軽やか 雅
 ウ 中天の月に信濃の夜は更け 樹
 大河の辺渡る雁 文
 年の差婚異国の嫁と走り蕎麦 雅
 恥じらふ態は世界共通 樹
 ハムスターお尻のフォトのかはゆらし 文
 壊されてまたマンシヨンの建つ 雅
 ナオ 着ぶくれの無心に遊ぶ子ども達 樹
 紙漉名人訪へば織月 文
 蘊蓄は酒を酌む度長くなり 雅
 女優の恋は太く激しく 樹
 「天上紅蓮」法皇の愛放縦で 文
 観光バスの行き違ふ径 雅
 ナウ 富士近き温泉宿にマカオから 樹
 春朝に買ふ名も知らぬ魚 文
 紡ぎ出す色のはんなり花衣 文
 座布団並ぶ麗らかな緑 執筆

連衆 青木秀樹 橘 文子

藤祭興行の各作品は、古式に則つて懐紙に墨書し、水引にて綴じたものを約一ヶ月後に同社に奉納します。懐紙奉納当日の神事と直会の後、正式俳諧の宗匠、執筆、奉納各巻の捌、猫婁会役員一同一座し、数巻の二十韻を巻くのが恒例です。

正式俳諧二題

昨年十月の芭蕉忌と、今年四月の亀戸天神社藤祭の正式俳諧では、猫蓑会創設者、東明雅先生のご長女、武井雅子丈が執筆をつとめられました。この機会に、明雅先生が執筆をつとめられた、信州大学連句会の五十巻満尾記念正式俳諧について、明雅先生の連句の師であり、正式俳諧の師でもある根津声丈翁が主宰誌『山櫻』に書かれた文章を転載します。

併せて、明雅先生のかつての主宰誌『季刊連句』から、はじめての亀戸天神社での正式俳諧に関連して、明雅先生が亀戸天神社と連歌のかかわりについて書かれた文章（『猫蓑通信』第八十四号にも再録したもの）、および、元猫蓑会副主宰、式田和子先生が『季刊連句』同号に書かれた、第一回藤祭正式俳諧の記録を転載し、正式俳諧継承の五十年にわたる歩みを辿ります。

正式俳諧

信州大文学部連句会五十巻満尾記念

根津声丈

昭和四十二（一九六七）年五月二十五日刊

『山櫻』第二十一号より転載

昭和三十六年より、毎月第二日曜日に開会しつづけて昨四十一年六月迄に、哥仙五十巻を満尾した。いつも普通の出勝にて執行し、正式にて張行することは初めてである。場処は深志町の天神社境内の齋館で、会するもの十五人、席

入をする前に、役員及び連衆の心得を、声丈私に簡単に話すことにしました。

掟書

諸礼停止、一句一直、出合遠近但声先、
月花一句。

諸礼停止とは、巧拙老幼によりて座を定めるの主旨なれば、位階勲等などの有無をとわぬことである。古い例をあげれば、風朗が花の木を嗣ぎし時は、二条家の鈿駄御殿に於いて、時の陛下より白菊の御製を賜りて、宗匠風朗脇宗匠杜鶯執筆百池、向合貴賓席に皇太子様、二条公、以上上段の間、正面御簾が下つて、天皇出御。下段の間に一般連衆が両側に流れ、末座正面へ向つて知司以下役員が居並ぶ。と云ふ大袈裟のものであったが今日では巧拙老幼位のことと心得ればよろしい。

一句一直とは附句に就て宗匠の加筆がある。出合遠近但声先とは附句の出来た人が同時に二人立った時には、末席の人に譲れと云う事であるが、附け或は附句と声があれば其人が先である。

月花一句とは（月の句、花の句は・編注）一人で一句以上するなと云うことである。

宗匠は和哥三神が御護りくださると心得、依怙鼠肩の心を起さぬこと、起れば三神が離れて正しい附け運びが出来ぬようになる。

脇宗匠は附句につき宗匠より諮問がある場合

には答える外、宗匠が句の花を附けた時に之を捌く。

執筆は当日の花形であつて、執筆は文台の扱い、其起居の動作、吟声の出来不出来等により、席の立派になるもならぬも双肩にかかつて居る事である。普段十分に錬磨しておくべきである。次は知司である。知司は当日の亭主役である。萬事にぬかりなく、静かにして引緊つた席にして、一般に好感のもてる様にするの大責任のある大役である。座見は皆席に就いたら、袖懐紙

及小短（小短冊・編注）を落なく配る等（銘々硯等は昔の事にて其必要はない）。香元は前々より香炉を温めておき、中途にして燂の消えぬように心がけ、花前にて「香」と声のありし時は香盆を持つて宗匠の前に進む、宗匠が香をたくのを待つて床に供えて座に下がる。此配席は香道の志野流を元としてあるから、こんな簡単な者でないことを付加えておく。神式の場合、香は用いぬ。花前は玉串である。

連衆は、第一に私語雑談をせぬこと。附けと声をかけて起てば、其人が先に文台へ進むのである。

月も花も一句、一句以上せぬように。尤も之は百韻等の場合で、哥仙では二花三月で句いのは花は宗匠がするから、二句するようのことはなく月だけである。

連衆は執筆の読む声を聞いて、其都度袖懐紙に書きとめて、それを見て附句する。出来たら小短に認めて文台へ進み執筆に手渡す。

執筆は折合指合等見て、附く附かぬは宗匠が

きめる。附かぬ場合は小短を句主に返す。返されたら自分の席に下がる。附けば執筆が懐紙に認めて読むそれを聞いて席に戻る。執筆は一同に聞える程の声にて読み上げる。附かなくて席に戻ると判ってもその人が席に着く迄は次の人は立たぬこと、つまり席がごたくからである。かくの如くして満尾に至る。満尾になれば執筆は端作りを書き、懐紙を綴じて吟声して式を終る。以上かいつまんでの説明であります。此日満尾した哥仙を次に掲げます。

当日配役

宗匠芦丈 脇宗匠雪溪 執筆明雅 知司魚魯

香元素香 座見淡水 外九人連衆

御題

海の国魚の国誇り年迎う

賀状出ださん西に東に

芦丈
淡水
溪水

亀戸神社と連歌所 〈南柏雑記 15〉

東明雅

昭和六十二年（一九八七年）六月一日発行

『季刊連句』第十七号より転載

亀戸天神は、寛文初年（一六六一）に太宰府天神から奉遷されたものであり、そのころは東連歌所・西連歌所の二つの建物があつて、將軍（家綱）も立ち寄つたという。その後、享保

盆梅の香を放つ日に軸変えて
いらかの波にほそき陽炎
打終えし田の上に昼の月白く
ナウマン象の化石撫で見つ
母が居て明治百年も身に近く
温泉約しておけど娘は来ず
匿名の処あり心ときめかし
鳥群れ舞う雪原の夕
氷柱研ぎすまし黙守る一部落
風流武勇背中合せに
紋暖簾下げて老舗の月の宴
釣狂気が鱸提げこむ
ザボン一ツのみにて棚を明るうし
息せき上がる階段の子等
方丈も袈裟ぬぎ花に嘯かれ
レンズ磨きの春愁を云う
今宮の安良居祭見る阿呆と
托児ゆだねて通う短大
恋や恋昔の色香猶残り

紫 晃
きよみ
魚 魯
雪 溪
水 魯
溪 晃
水 晃
み 晃
み 晃
み 晃
み 晃
み 晃
み 晃
み 晃
み 晃
み 晃
み 晃

兵に銀笛吹くは誰やら
大夕焼汐路も船も濃茜に
観光バスは浜木綿の道
木綿機織る松坂の町はずれ
硝子のケースに古鈴納めて
門衛としての勤続四十年
同吟の譜は羅生門なり
月の秋ニカッスルに鶏髯れ
熟るる林檎の蔭に一ト息
夜すがらの野分の去りし静かさは
常にも乱髪は見せまじ
膝にのる孫の爪切る外縁に
大欠伸して犬の又寝る
土降りがやんでも花に陽の曇り
石あたたかしの庭の南

昌 三
高 夷
魯
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三
昌 三

午前十一時開始、中入三十分間、再開午後四時
満尾、執筆懐紙を整えて吟声して終了。散会
時昭和四十二年三月十二日

（二七一六―一七三五）のころまでは存在したが、火事で消失したらしく、西連歌所のみが明和元年（一七六四）再建され、これも大破して、寛政十二年（一八〇〇）再び建てられた。この間、菅公の八百年忌・九百年忌には、特別に千句連歌が興行された外、年中行事としては、正月二日に裏白連歌神事（懐紙の表ばかり八句の連歌）、七月七日には和歌・連歌の神事、九月十三日には連歌の神事が行なわれ、また、毎

二月二十五日には月次の連歌会が催されたのである。その作品も残って、懐紙の一部は整理され、「亀戸天満宮史料集」（昭和五十二年刊）に掲載されている。さて、その西連歌所は寛政十二年の地図によれば、瓊門（中門）の前の池に架つた三の橋の西側にちゃんと記されているが、寛政十三年の朱印絵図面には記載されていない。これはこの

年御開帳があつた為、その場所が葎簀張の水茶屋になつてゐるようである。水茶屋とは路傍や境内でお茶を飲ませる茶屋のことだが、せつかくの連歌所は毀されたのか。勿体ない話だが、これは、一つには当時の連歌の衰微ぶりを物語るものである。幕府では流石に、正月の吉例として、いわゆる柳営連歌を幕末まで残存していたけれども、それは一般の庶民とは何の関係もないものとなつてゐた。俳諧・雑俳が庶民の人気をよんでいた時代に、いくらその俳諧や雑俳の祖ともいふべき連歌の神様が天神様であると言つても、庶民を説得できなくなつたのである。

そう言えば、全国の天神様のうち、連歌道で最も権威のあつたのは、京都の北野天神で、すでに十四世紀末ごろから、干句・万句の興行がなされ、はじめは社坊公文所、続いて松梅院で興行され、その長を北野連歌会所奉行、あるいは宗匠と呼び、連歌界のオーソリティーとなつたのである。この北野の連歌会所がどうなつてゐるか、確かめてはいないけれども、すくなくとも、正式の連歌のできる方が殆んどない今日では、たとえ建物は残つてゐるとしても、有名無実のものであり、おそらくは、北野神社も、昨今の受験ブームのあおりをうけて、合格祈願の絵馬で埋まつてゐることだろう。神様であっても浮世の転変は避けられないとすれば、まして凡人は、亀戸天神の池畔に咲きほこる藤波の美しさに、一時の鬱を散ずるのも神の功德である。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 式田和子

昭和六十二年（一九八七）年六月一日発行
『季刊連句』第十七号より転載

昭和六十二年四月二十五日、明雅師門下猫蓑会連衆は、亀戸天神藤祭りに正式俳諧を奉納した。式次第は次の通りである。

十二時三十分、正式参拝。明雅師玉串奉典。奉納興行の緊張が漲る。

一時、知司杉内徒司、興行開始を告げる。

(一) 席入り。座配下鉢清子先導して、宗匠明雅師、脇宗匠杉江杉亭、貴賓、久保田月鈴子先生、大鳥居武司宮司、木村恒雄禰寅、石寒太先生、加藤耕子先生着席。あと連衆一同着席。

(二) 配硯。重ね硯を原田千町配る。

(三) 献花。副知司中島啓世、宗匠の前に進み準備の整つた旨をのべ、宗匠の「献花」の声で花司式田和子、花（当日は牡丹）を活け、神前に供える。

(四) 執筆呼び出し。宗匠「執筆、執筆」と呼び、執筆中川哲、文台を持つて立つ。神前に着座。

(五) 文台捌。執筆文台捌きを終え歌膝になつて待つ。

(六) 知司挨拶。知司下俳諧十五句までできてゐる旨を告げ、連衆に付句を促す。

(七) 俳諧興行。連衆は付句を小短冊に書き「付け」といつて示し文台の前に進み一礼して示す。執筆は去り嫌いを調べ宗匠に見せ、よしとあれば「句有り」と読み懐紙に認め小短冊を返す。句主は座に戻り執筆は重ねてその句を読む。

(八) 玉串奉献。句の花の前句が付いたら、執筆は「花前」と呼ぶ。副知司秋元正江進み出て、宗

匠に花の句を乞う。花の句主が定まつたら執筆は前句を詠む。田中神官玉串を持つて出、宗匠に渡し、宗匠は神前に供え拝礼。

(九) 花の句披露。宗匠の花の句を執筆は脇宗匠に聞きを乞い「句有り」といつて吟声して書く。挙句は執筆。

(十) 吟声。文台返し。奉納。執筆は当日の一卷を披露し、作法通り文台を返し作品を奉納、配硯が重ね硯を集め、興行は終了する。

この間約一時間。このあと、第二十一回猫蓑会が貴賓、来会者を交え七席、賑かに興行された。宗匠の花の句は、

新しき文臺花に使ひ初め 明雅

この新しい文台は、五十嵐讓介氏作、銘は「左沢」。二見ヶ浦を画かれた格調高いもので、絵は名和浩画伯である。

歌麿江戸名所十景の内、亀戸天神の錦絵にある太鼓橋を渡ると社殿。その右に昨年能楽堂が新築された。明雅師はお祝詞のうちに、昔から連歌の奉納もあつたことを書かれたのが縁で、今度の正式俳諧の奉納が定つてから、連衆一同は好天、好声、好歩、好礼、好句と数限りなく天神様に祈るような気持ちで過したが、幸い当日は藤は満開に匂い立ち、天気は上々、参拝客はひきもきらず、興行は立ち見の振りのお客もあり、名古屋、豊田からの参会者も加えて八十余名の大盛会となつた。

凜とした宗匠、歌膝立てた執筆の上々吉の吟声が響き、格調高く厳肅ながら、女性も交つた興行のため、藤の花のようにほのかな艶の漂つたのは藤祭りにふさわしかったのではなからうか。

終りに、亀戸天神社の数々のご好意に厚く御礼申上げる次第である。

温故知新

13…実ありて哀しびを添ふる

●暮れば登る峯の寺

『猿蓑集』巻之五 元禄四（一六九二）年

いちどきに二日の物も喰て置

凡兆

雪けにさむき嶋の北風

史邦

火ともしに暮れば登る峯の寺

去來

〔鶯の羽も〕歌仙 ナオ折立く三句目

●山の上のお宮の灯明

『赤い蠟燭と人魚』小川未明 大正十（一九二二）年 東京朝日新聞

（前略）二人は、その赤ん坊を育てることにしました。その子は女の児であったのでありません。そして胴から下の方は、人間の姿でなく、魚の形をしていましたので、お爺さんも、お婆さんも、話に聞いている人魚にちがいないと思いました。

「これは、人間の子じゃあないが……」と、お爺さんは、赤ん坊を見て頭を傾けました。

「私もそう思います。しかし人間の子でなくても、なんというやさしい、可愛らしい顔の女の子でありますよ」と、お婆さんは言いました。

（中略）するとここに不思議な話がありました。この絵を描いた蠟燭を山の上のお宮にあげてその燃えさしを身に付けて、海に出ると、ど

んな大暴風雨の日でも決して船が顛覆したり溺れて死ぬような災難がないということが、いつからともなくみんなの口々に噂となって上りました。

「海の神様を祭ったお宮様だもの、綺麗な蠟燭をあげれば、神様もお喜びなさるのにきまつている」と、その町の人々は言いました。

蠟燭屋では、絵を描いた蠟燭が売れるのでお爺さんは、一生懸命に朝から晩まで蠟燭を造りますと、傍で娘は、手の痛くなるのも我慢して赤い絵具で絵を描いたのであります。

（中略）この話は遠くの村まで響きました。遠方の船乗りやまた、漁師は、神様にあがった絵を描いた蠟燭の燃えさしを手に入れたいものだというので、わざわざ遠い処をやって来ました。そして、蠟燭を買って、山に登り、お宮に参詣して、蠟燭に火をつけて捧げ、その燃えて短くなるのを待つて、またそれを戴いて帰りました。だから、夜となく、昼となく、山の上のお宮には、蠟燭の火の絶えたことはありません。殊に、夜は美しく燈火の光が海の上からも望まれたのであります。（後略）

●能登の小島の観音堂

谷川健一自伝抄「海やまのあいだ」より
『魂の民俗学』二〇〇六年富山房インターナショナル刊所収

昭和四十九年の四月、私は旧の十三日の月あかりのなかを、能登の鵜浦の北端に位置する鹿

渡島にむかっていた。道が海岸に出ると海中の岩をふんで渡れる小島があった。小島には観音堂が立っている。そこから出てきた老人が手桶をさげていた。聞けば今灯明と水をあげてきたという。老人はさらに話をついで、鹿渡島の日を孤立している七軒の家が、一週間のうち一日をそれぞれの家の分担にして、昔から観音堂を守りつぎ、朝夕の供養を欠かしたことがないと言った。

前日もこのあたりは吹雪に見舞われたということであった。私は能登の冬の吹雪にとじこめられた観音堂に、夜もすがら消えない灯火を思い描いた。

解題●かつて猿蓑集「鶯の羽も」歌仙を読み、この三句を目にしたとき、子供のころ好きだった小川未明の名作童話「赤い蠟燭と人魚」を思い出した。

もう一つの文の作者、谷川健一氏は、柳田國男の衣鉢を継ぐ民俗学の大家で、歌人でもある。能登の小島の観音堂をめぐるこの一文は、芭蕉俳諧も未明童話も、人の生活と風土の確かな現実をふまえていることを再確認させてくれる。この歌仙は芭蕉が奥の細道の旅から北陸道を通って帰還した直後の時期のもので、去来は芭蕉や會良から、北陸の海浜のこうした庶民生活の話聞いたのかも知れない。

柳田國男は、芭蕉俳諧が、当時の民俗について、ほかにはない記録資料を豊富に含んでいると書いて「東海道の一筋も知らぬ人、風雅におぼつかなし」（三冊子）、「歌に実ありてしかも悲しびを添ふる……其の細き一筋をたどり失ふ事なかれ」（柴門ノ辞）などの芭蕉の言葉を思う。（斎）

第一八回えひめ俵口連句全国大会
俵口連句会会長賞受賞作品

歌仙「美祿」

鈴木千恵子 捌

秋の夜的美祿静かに飲むべかり 千恵子
 遠来の友立待の庭 香織
 胡桃の実ボールがはりに投げ合ひて 玄太
 オウムの首は右に左に 唯
 指揮棒のかすかな塵を拭ひ去る 美恵
 汗のしづくの描く曲線 吉文
 代数をやつと片付け夏終はり 俊子
 ウ 久しぶりだね大人びた君 唯
 一か八かフルスイングでプロポーズ 織
 同じ言葉のコピー機にかけ 恵
 抜歯した虫歯の穴をさがす舌 全
 神の棲む湖隕石の跡 俊
 狼の遠吠えの森月冴えて 吉
 赤頭巾ちやん衣装手作り 織
 とぎれずにフラッシュ光る体育館 唯
 地方記者から質問が飛び 織
 山を背に走るSL花万朵 玄
 貴重な蜂を守る人々 恵
 ナオ 国境のなき医師団に蟹気楼 俊
 心の針を中東に向け 吉
 ゆるキャラが愛想ふりまき握手する 玄
 踊つてばかりテレビCM 俊
 禅僧の三ヶ国語のお説教 吉
 蛇の会話もわかるふりして 恵
 サマードレス今日はできない逆上がり 唯

見たぞ見えたぞいやらしい奴
 羅生門昇つてみれば恋最中
 浅茅が宿に結びたる夢
 雲晴れてゆらり蓑虫月照らす

アップルパイの焼き加減よく

ナウ女子会は話佳境に入る頃

渾名で呼んだ教師健在

亡き父の佛過ぎるアーケード

いっどこでもスマホいぢくる

花ふぶき路傍の草に降りしきり

畑打つ人の振り返る方

連衆 平林香織 丸山玄太 鳥海唯

山口美恵 永田吉文 三木俊子

平成二十五年九月二十一日 首尾

於 グランドヒル市ヶ谷

「美祿」と「金亀城」

鈴木千恵子

三月の半ば、俵口連句大会入賞の知らせが届き、とても幸せな気持ちに包まれた。とりわけ、その作品は神楽坂連句会の二十周年で捌かせていただいた作品だったから。

二十周年では「祿」の座と伺い、前日に「美祿」の語を辞書から見出した。当日の座には、古くからの会員も三十代の新人も。美恵さんが、無口な玄太さんに「あまり静かなので、名前を幻太と書いてしまったわ」とおっしゃっていたことなどを楽しく思い出す。というわけで、猫蓑

の活動（の一部）を評価していただいたという私的な感慨で、大会に向かった。同じく入賞者の佐々木有子さんとの道中である。

町に降り立つと、風が柔らかいと感じ、心はのびやかにほっこりとする。しかし、大会当日の発句も作らなくてはならない。夏の気分の松山だが、暦の上ではまだ春である。曲るときに軋んだ音をたてる路面電車で、直角を二度ほど経て、松山城に登ったのは初めてのことだった。お城には黄金の亀が棲むと伝えられ、別名を金亀城というを知ったのも初めてだった。そこで考えた発句は「いにしへの金亀城にも亀鳴くや」。観念的で実感のこもった挨拶性が薄いかと心配したが、井上雨道さんの「楠の芽立を仰ぐ石段」という脇に救われたようだ。すっかり夏のような一日だったが、春にも「芽立」などというその沸き立つような緑に相応しい季語があったのだ。振り返れば、いつも俄仕込みの発句を作っている。それでも何とか二十韻を巻き終え、帰路の間際には観覧車のくるりんに乗る、一足早い「新祿」や「万祿」を空中から堪能することもできた。

俵口は、歌仙の募吟を特徴とする全国規模の貴重な大会である。素敵な脇を付けてくださった雨道さんは、今回その会長を退かれるとのことである。えひめ俵口連句会の変わらぬ、ますますのご発展を、とお祈り申し上げます。そして神楽坂連句会も勿論猫蓑会も。さらにかくも楽しい連句の魅力が、いっそう広がっていったらよいのにと、こんな折にはいつも考える。

第一八回えひめ俵口連句全国大会
俵口賞受賞作品

歌仙「甚平の藍」 佐々木有子 捌

おろしたる甚平の藍匂ひたつ 有子
 喜雨の過ぎたる後の町騒 瑞枝
 ぴつたりとジグソーパズル嵌るらん 淳子
 壁のフックに掛ける鍵束 ひろみ
 月見むと団子並べてすき活け 市誠
 ちゅんちゅん雀蛤となる 枝
 四番でエースで笑顔爽やかに 淳
 フォーク並びにコンビニのレジ 枝
 期待して待つのが好きな宝籤 誠
 胸にふたつの黒子いとほし み
 父の名は秘めたるままに子を生みて 淳
 血筋争ふ応仁の乱 誠
 遠吠えが遠吠えを呼び月凍つる 枝
 闇鍋の箸拾ふ何やら 淳
 乱高下株価に踊るトレーダー 誠
 ビル百階の避難訓練 み
 花の雲国々の酒飲みくらべ 淳
 爺の得意は鮓の竿釣 淳
 ナオ遠寺の鐘股々と山笑ふ 枝
 親は板前シェフになりたい 全
 巴里祭は屋根裏部屋で眠るだけ 全
 D坂にゐる明智小五郎 誠
 塩煎餅テレビドラマの必需品 誠
 冬眠の亀つつき起しぬ 淳
 掘炬燵意味深な足からみを取り 淳

ほんの火遊び地獄への道 誠
 ララバイのやうに響ける波の音 淳
 真綿にくるむ珍しき貝 有
 寄りかかる大黒柱に月の影 全
 団栗ころりころり地に落つ 全
 ナウ美術展入賞はやもささやかな 枝
 空青くしてにぎるハンドル 誠
 読んだことないが憲法大事にす 枝
 語らひ合へば気分上々 有
 花守の心で聞くは花の声 有
 あちらこちらに畑を鋤く人 誠
 連衆 大窪瑞枝 上月淳子 江津ひろみ
 島崎市誠
 平成二十五年七月十五日 首尾
 於 桃径庵

えひめ俵口連句全国大会
佐々木有子

いつもたくさんのご馳走と飲み物そして心地
 よいおもてなしで、連句の座を一段と楽しくし
 て下さる桃径庵での四ノ宮ブルーの連句会。昨
 年夏、その会をやっていらっしやる式田恭子さ
 まにお捌を仰せつかり、一卷巻かせて頂きまし
 た。格調の高い句を詠むのは少し苦手で、どち
 らかというとくすつと笑って頂けるような句を
 作りたい性分ですが、当日は飲み過ぎないぞと
 いう捌の自覚をもって会に臨みました。
 自由自在に句をお作りになるベテランのお二

人と新鮮な感覚の比較的若いお二人（連句の世
 界では若手という意味です）の絶妙な組み合わせ
 せのご連衆方に助けられ、楽しい運座となりま
 した。ポンポンと出る句に座も盛り上がり、思っ
 たより短い時間で巻き上がったように記憶して
 います。この思い出深い一卷に俵口賞を頂きま
 したことは殊の他の喜びとなりました。
 えひめ俵口連句全国大会前日の四月二十八
 日、俵口連句協会会長賞を受賞なさった鈴木千
 恵子さまと羽田で待ち合わせ、松山へ飛びまし
 た。小雨降る中、二人で松山城をゆっくりと見
 て回り、普段一緒に過ごす機会の少ない千恵子さ
 まとたくさんお話しできたことも、いい思い出
 となりました。夜は土地のおいしい物を頂きな
 がらの前夜祭。俵口の方々の優しさが大変あり
 がたく、極上のひと時となりました。
 翌二十九日は大会当日。緊張の表彰式、資料
 を基にした説得力のある室町連歌の魅力の講演
 に引き続き、座名に椿の名前を入れた十卓の座
 に分かれての実作会。幸運にも、瀧澤尚子さま
 お捌のお席に入れて頂き、一度はご一緒できた
 らとの願いが叶ったのです。瀧澤さまの連句へ
 の真摯な姿勢に学ぶこと多く、背筋の伸びる思
 いが致しました。座名の「以津の夢」という椿は、
 調べてみると、白い花弁にほんのり薄いピンク
 のぼかしが入った一重で、咲き方は桔梗に似て
 いるとのこと。その上品な佇まいの淡い桃色に、
 桃径庵との繋がりを思わずにはいられませんで
 した。一人一人の個性と人との繋がり、その両
 方を大切に作る連句に乾杯！

●第二十四回猫養同人会総会が開催されました

六月十五日(日曜日)、新宿ワシントンホテル新館にて、第二十四回猫養同人会総会が開催されました。十一時からの議事後、八卓に分かれて歌仙を興行しました。当日巻かれた歌仙八巻のうち四巻は今号のP2、3に掲載されています。残り四巻は次号(第九七号)に掲載予定です。

●第二百二十九回例会(亀戸天神社藤祭り)が開催されました

四月二十三日(火曜日)、亀戸天神社にて、藤祭り俳諧興行が開催されました。正午より亀戸天神社神楽殿にて公開の正式俳諧を興行し、引き続き社務所内の会場にて、九卓に分かれて二十韻の実作を行いました。当日の正式俳諧二十韻一巻は今号のP4、実作会二十韻九巻はP6～P9に掲載しています。

●今後の予定

●第百三十回例会

平成二十六年年度総会・歌仙実作
七月十六日(水曜日)
十一時～十七時(受付十時半より)
於 江東区芭蕉記念館

●芭蕉忌正式俳諧稽古

九月十七日(水曜日)
於 江東区芭蕉記念館

●第百三十一回例会

芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌脇起源心実作
十月十五日(水曜日)
於 江東区芭蕉記念館

●猫養基金にご協力ありがとうございました

・武井雅子様 平成二十六年四月 一万円
・山寺たつみ様 平成二十六年五月 五千元
・名本敦子様 平成二十六年五月 五千元
・匿名 平成二十六年六月 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●会員の出版

・句集『橋懸り』
染谷佳之子著 角川学芸出版
二六六七円十税

・『世界へ飛んだ蛙…芭蕉から地球俳句へ』
近藤蕉肝著 里文出版刊

二三〇〇円十税

・四宮連句会作品集第十一巻『花軍』
非売品 お問い合わせは式田恭子へ

●受賞

・第十八回えひめ俳口連句全国大会
俳口連句会会長賞「美祿」 鈴木千恵子 捌
俳口賞「甚平の藍」 佐々木有子 捌
右二巻は今号のP14、15に収録しています。

●新会員

・菅原通済 二十六年五月入会

・國司正夫 二十六年五月入会

●新同人

・平林香織
・名古屋富子
・江津ひろみ

●併号変更

・林 鐵男↓林 転石てんせきに変更

●住所変更

・近藤蕉肝 東京都国分寺市へ移転

●訃報

・二十六年六月十一日、同人会員の二村文人様がお逝去されました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。

●バックナンバー

『猫養通信』バックナンバーは、創刊号以下すべて猫養会オフィシャルサイト <http://www.neko-mino.org>にて閲覧、ダウンロードできます。

季刊 『猫養通信』第九十六号

平成二十六年七月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社